

あなたのいない浄土より

あなたのいる地獄にわたしは助けに行く

阿弥陀三尊



無憂山法観寺

受 恩 刻 石

— 受けた恩は心に刻む —

人生に決められた運命というものはなく、思い通りにはいかないのが人生であるのだと仏教では説きます。それを「求不得苦」（求めるものは得られない苦悩）といい、もしも生まれたときから決められた人生があるとするならば一日の中に何千回という選択や迷いもなく、生命観という“いのち”を考えなくてもいいでしょう。

また探究心など思考することも不要となり、人が生きる側面には持たなければならぬものがあります。

それが知恵（頭脳）と智慧（心）です。「一水四見」という同じ事象や現象は、見る人によっては見え方や、捉え方は異なるものであり、人それぞれには個々の思いや願いも異なるものです。それは“欲”の大小によって変化します。「こうでありたい」や、「こうであって欲しい」など、

その欲望が心を右往左往させ、自身を自ら不安へと導き、心を揺るがせるのです。

一つ岩が風に揺るがないように

賢者は非難と称賛に動じない

釈迦

釈迦は『発句経』（Dhammapada）において、心を動揺させてはならないと説きます。その動揺となる対象は欲なのです。人は一度おいしい味を占めると、もう一度、もう一回とキリはなく、欲は欲を作り果てることがありません。

やがて欲は心を侵し、貪りの心まみれと化します。これが表面化されてしまうことで、わがまま・傲慢・自己中心的・など「利己的」な人間性を作りだすのです。

欲というものは心が楽な方へ、楽な方へ誘導するのが得意なのです。怠け癖がついた心は、いかに楽をして生きていけるかと、そればかりを考えてしまう習慣が身に付きます。それは食べものでいうならば、糖分など高カロリーばかりを摂取するのと同じで

あり、やがて体は悲鳴を上げて糖尿病や肝機能に至る病を発症させてしまうのです。いわゆる偏食であり、仏教でも同じく、“偏らないよう、今に心を置くこと”が何よりも肝要であると説きます。

今に心と書いて「念」という漢字になるように、今なすべきことは今だけに専念する一意専心なのです。

苦難の中では人は磨かれるが

安逸の中では人は墮落していく

いかに欲するものであつたとしても理性を抑える心を持ち合わせていなければ、欲は暴走し、心は事故に遭うのです。

光量子仮説・相対性理論で有名な二十世紀最高の理論物理学者アインシュタイン（一八七九―一九五五）は、人生をこのように喩えています。

人生は自転車のようなものだ。

走り続けなければ倒れてしまう。

物理学者・アインシュタイン

何ごとも、常に偏執しないよう習慣づけ
ておくことが自身に希求されるのです。

- 一、何ごとも、偏らないよう
- 二、何ごとも、拘らないよう
- 三、何ごとも、捉われないよう

この右記の三つの思考を上手く制御がで
きず、心の主である自身を墮落させること
に欲は働きかけるのです。これが仏教でい
う「魔」(Māra)というものです。

一生懸命だと知恵が出る

中途半端だと愚痴が出る

いい加減だと言いつい訳が出る

右記は戦国武将の武田信玄の有名なお言
葉ですが、欲を暴走させることより自分自
身を甘やかす、楽な方へと自分の都合はか
りを考えつくような性格を作ってしまうの
だと言っているのです。

勇敢な人は心に名言をもっている

心というものは虚空のように果てしなく
広々としているのに、愚痴や言い訳がでる
人の心は、魔に侵されていることに気づか
ず、苦しみや悩みとなる障壁を自ら作って
しまっているのです。

何ごとにおいても、“ほどほど”に心を
保つ姿勢が愚痴や言い訳をしない心を構成
させ、自分よがりや楽をしたいと思える心
を遠ざけてくれるのです。

仏教ではこの“ほどほど”の思想は
「中道」という根本観念となっています。

バランス感覚がおかしくなると歩行しにく
いように、心も同じくほどほどを意識する
ことで心が偏らない性格・思考を形成させ、
安定の中で一日一日を過ごしていくことが
できるのです。

生きる上には目的意識となる夢や、目標
など願望があり、その願いは常に今を思念
することです。一年後、数十年後の来世に
願いを馳せることはありません

人は皆“今、幸せに成りたい”と求め、
いま満たされたいと思うものです。

欲から起る分かれ道

「勝ち組」になるのではなく、

「幸せ組」を選んでいくこと。

社会や権力など人の上に立つには凡庸な
人とはことなり、計り知れない苦労と努力
がともない、継続できない上に立つ人に見
える傾向は自分よがりの人に限りません。

一日一日の積み重ねが人生

人生はとても単純なのです。その人生に
は残念ながらエレベーターやヘリコプターな
ど高い地位に伸し上がることはなく、夢を
見ることは夢のままであり、夢を叶えたく
れば一日一日の中に努力を積み重ねること
で、莫大な力を発揮させます。

突如として成功している人たちを見ると、
「あの人は運が良かったのだ」など思う人
もいるかも知れません。しかしそれは、た
だの僻みであり、その人の本質を見抜けて
いないのです。

能ある鷹は爪を隠し、一流の人の

本質は見えにくいものである。

ことわざであるように、苦勞話しを聞かれない以上、話す人はいません。また成功している人は成功しているとも思っておらず、まだまだ上には上がいると思ひ、向上心を保持しています。

世界でもトップクラスを誇る頭脳明晰なハーバード大学の図書館の壁には、生徒たちが書かれた思われる落書きは有名です。

その言葉は二十七つ示されており、大学側も消さずに生徒たちの心緒として残したままにしています。皆さまも自身を奮い立たせる信条ともなればと存じます。いくつかを私なりに翻訳し列挙してみます。

- ❖ 今寝れば、あなたは夢を見るだろう
- ❖ 今勉強すれば、あなたは夢をつかむだろう
- ❖ 今日あなたが無駄にした日は、死んだ人が必死に生きたいと願った明日である。

❖ 物事に取りかかるべき一番早い時は、

あなたが「遅かった」と感じた瞬間である。

❖ 今日できることを、明日に延ばさない。

❖ 勉強の苦しみは一瞬であるが、勉強しなかった後悔は一生続く。

❖ 勉強において「時間がなかった」は、できない言い訳でなく、努力が足りないのである。

❖ 「幸せ」と「学績」は関係ないが、「成功」と「学績」は大いに関係がある。

❖ 成功をするためには、早めに行動し、勤勉でなくてはならない。

❖ あなたが今日歩かないなら、明日は走ることになるだろう。

❖ この瞬間にもあなたのライバルはひたすら勉強している。

❖ あなたの夢は今日の前にある。なぜ手を伸ばささないの？

❖ 今に目をつむむということとは、将来の可能性にも目をつむむことだ。

❖ 学績というの自分はやった絶対量に比例する。

❖ すばらしい業績というのは、ほかの人が寝ているときに達成される。

❖ 不可能というのは急情の結果による言い訳である。

❖ やった努力は自分に絶対返ってくる。

いくつかを列挙しましたが、すべてが「今」に集約されており、仏教と同じ理に適用とばかりです。

釈迦や空海という、偉大なイメージがありと思いますが、もともと普通の方なのです。数多と偉人なども同じです。ただ共通していることは、努力家であったということなのです。

日本では「楽聖」と呼称され、音楽史において極めて重要な世界の作曲家の一人、ベートーヴェン（一七七〇・一八二七）は努力においてこのように述べています。

努力しても成功するとは限らないが、成功している人は皆努力している。

作曲家・ベートーヴェン

また、映画『敦煌』の原作でも有名であり、ノーベル文学賞候補でもあった小説家の井上靖氏（一九〇七―一九九一）も努力をこのように述べています。

努力する人は希望を語り、
怠ける人は不満を語る。

小説家・井上康

今、自分を変えたいと願う人は、今この瞬間から心の中の思いを実践していくことで変化が起こります。

その実践（実行）をしていく中には不安など「私にはできるかな？私には無理かな？」と諦めの思いを持ってはならず、「出来る」と言い聞かせることが大切です。

成功するか分からないけども、成長は必ず約束されているのです。

その成長をしたときには新しい人生の景色を見ることができ、今まで成長を見たことのない自分にはこんな不思議な力があるのだと、新しい自分に気づくことができるとでしょう。

成長した時、目指していた目標や夢などは変更され、新しい夢や目標が生まれていくことも多々あります。また努力することで、本当に自分がやりたかった目的を見つけてすることもできるのです。

夢は逃げない。

逃げているのは自分のいじけた心

世界ケンタッキーフライドチキン創業者カーネル・サンダース（一八九〇―一九八〇）も開業をしたのが六十五歳です。

また実業家の稲川素子氏（一九三四―）は七十二歳のときに三度目の挑戦で東京大学大学院に合格、その後八十二歳に博士号を取得されました。

年齢は関係なく「やるか」「やらないか」の違いであり、努力すれば自分の種から必ず芽を出していくのです。

生きる上で「勝ち組」になるのではなく「幸せ組」になるのだと考えていく姿勢が大切であり、上辺や世間体ばかりを生きる

主軸となれば本来の自分らしさを失い、疲弊するばかりの人生となります。

成功していると思われる人は「勝ち組」の人ではなく「幸せ組」の方なのです。

「勝ち組」になろうとしている人は、勝とうとするばかり相手の気持ちを疎かにする傾向も強く、自分さえ良ければと、利己的な性質が定着しています。周囲に気を使っているようで、実は自分が一番利益（金銭ではなく、優位の意味。）を取ろうとする魂胆があり、損得勘定で人や世間を見ています。それは実に対人からは見透かされていることも気づいていないのです。

部下が100人いるなら、

自分の偉さは101番目だと

思える人が真のリーダーや。

実業者・松下幸之助

右記は「経営の神様」と異名を持つ和歌山県出身の現・パナソニックグループ創業社（旧・松下電器産業）の実業家、発明家の

松下幸之助氏（一八九四―一九八九）は、「自己を没却して、まず相手を立てる。自己を去って相手を生かす。」そう相手の立場を考えて自分を生かしていくことが繁栄につながる姿であると明確にお伝えしてくれています。仏教も無論のこと利他実践である他を生かすことより自己も生かされる自利利他円満の法則なのです。

すべてではないものの損得でものごとを判断するのではなく、正しいか正しくないかで判断できる人間であることが、他者からの信用と信頼を得ることができなのです。



南無大師遍照金剛

真言宗は平安時代初期に弘法大師（空海）（七七四―八三五）によって開かれた仏教の中の秘密の教えである密教とされています。

それは聖道門であるこの現世において迷いを断ち、この世において仏に成れる教えを説いた「即身成仏」を旗幟とします。この秘密とは隠している教えと思う人がいま

すが、決して隠している秘密ではなく、自らが自らを隠してしまっている秘密なのです。これを衆生自秘といっています。

例えば、金銭や自分の利益だけに目を奪われ大切なことに気づかず、自ら正しいことに蓋をしてしまったのも秘密です。

迷えば、すなわち濁悪の処

悟れば、すなわち清浄の処にして

無染の境なり

空海撰『一切経開題』

空海は、無明（迷い）の最中にいるときは六道を輪廻する苦悩から逃れられない境地であり、迷いを断ち自ら悟れば、静かな池は月をそのまま映し出すように、こころは穏やかな境地になるのだと伝えます。

欲に打ち勝つ「克己心」を形成させることで迷いを退ける力ともなるのです。

欲にはさまざまな種類が在り、その欲は自身の置く境遇によって異なるものですが、臨機に応変していかなければなりません。

この世に生き残る者とは
最も力の強い者か、そうではない。
最も頭の賢い者か、そうでもない。
それは変化に適応できる者である。

右記は自然科学者ダーウインの『種の起源』より大学教授・経営哲学のレオン・メギンソン（一九二一―二〇一〇）がオリジナルに論じた言葉ですが、「変化に適応できる者」は、まさにその通りです。知恵と経験を備えておけば、機に應じ変化に適応していく力となります。その「知恵」と「経験」は「智慧」となり、その智慧とは自らに蓋をせずして常に自らが自らを気づかせてくれる智慧となるのです。これを如来秘密といっています。

医王の目には途に触れて皆薬なり
解宝の人は磁石を宝と見る

空海著『般若心経秘鍵』で述べたお言葉は、見識ある医者（の目）には道端に生える草

の中にも薬草を見つけ出す力があり、また宝石を見抜ける人にとつては何気ない石から宝石を見つけていることができると言っているのです。

いわゆる形而上的（超自然的な形を持つておらず感性を介しても認識できない現象）な人知を超越した働きであり、それは仏からのシグナル（信号）と捉えていただければ分かりやすいかもしれません。これを密教では「法身説法」といいますが、人知を通じて知る秘密なので形而上的とは申すものの実際は形而下的（感性を介し、経験によつて認識でき、時空間に現象的に顕現するもの）なものであるのです。

わたしたち人体は小宇宙であるマイクロコスモスであり、存在する大宇宙をマクロコスモスとして、哲学的にも二つの概念は異なるように本質は同じであるとし、いわゆる相即不離な関係であり、宇宙の秩序は、すべて調和されており、万物は照応されているのです。ここでは如来秘密のことは、最大限に簡略して伝えていきます。

その自らの智慧に蓋をしてしまうと大切なことは通り過ぎ、諸行無常である人生には時が止まることもなく、時を戻すこともなく、待った無し的人生を自ら惜しくさせてはいけません。

自身でも分かつてはいるが止められないのではなく、分かっているなら止める決断を持つ力を育てなければなりません。

やがて気づいたときには「後悔先に立たず」を痛感し、後悔の念を心に構築させてしまふのです。

邪見を発起すべからず

善根を断ずるがゆえに

空海著『秘密三昧耶仏戒儀』に述べられたお言葉ですが、よく「魔がさす」というものです。「油断一秒、怪我一生」とはこのことです。

仏教では、一切皆苦である思い通りにならない苦しみや、悩まず感情を円滑に運んでくれるようアドバイスを適切に説いていき、感情を元の状態「0」である梵語で「空」

(sunya)と訳語し、漢語ではよく「無」と漢訳され、リセットできるような紐解いていきます。お経の「経」とは、インドのサンクリット語（万有を人格化した梵天より授かったとされる言葉であり、古代インドの標準の文書語）では「ストラ」(sutra)といわれ、縫う・貫くという意味の梵語の動詞から作られたことより、教えを貫く「綱要」の意味をあらわします。

現在は陀羅尼、漢文、和文の基本、三種類に分類されますが、インド発祥の仏教は中国を経由して伝来したものですので漢文が主体となっています。

その「お経」には何を書いているのかが、分かり難いものです。端的にいうなら「仏から、あなたへ人生のアドバイス」を説く、真理の心髄が記されているのです。

妙薬 篋にみつれども、

嘗めざれば益無し、

珍衣 櫃に満つれども

著ざれば即ち寒し

『遍照庵揮性靈集』

前掲のお言葉は空海の漢詩文集を弟子の真濟（八〇〇・八六〇）が編纂されたお言葉より記述したのですが、わたしたちは「上求菩提、下化衆生」を軸として活動しているのが僧侶です。

上に向かっては仏の悟りの智慧を求め、下に向かっては生きとし生ける者を教化救済し、大乘仏教の理念「利他実践」を表したものです。自分独りのみの悟りに満足することを否定し、衆生とともにさとりの彼岸に到ることを厳しく求めます。ですから「お経」の内容を会得である自分に得た利益を自分だけのものにせず、他に伝えていくことが大切なのです。

不自由を、常と思えば不足なし

徳川家康

江戸幕府の初代征夷大將軍・徳川家康氏（一五四三・一六一六）から二六五年もの長きに亘り、太平の世を存続させました。その家康は当の大將軍ですが、その心とは裏腹に苦悩の中より出たお言葉と思います。

周囲から、あの人がうまく行っているなど思う人はその反面、当人の心中は他人には分からない苦悩もあるものです。その心が私たちが人生の主人公となります。

心を観自在である自由自在に感情をコントロールできる免許を持つことができれば、世間の基準には捉われず、自分の中で幸せを見出していけるのです。

『法華経』の二十五品にある有名な『観音経』に、「遊於娑婆世界」とあります。これを現代訳しますと「観音様はこの世において、衆生の苦しみを取り除くのは遊びのようなものだ」と説きます。

そんなことできるのか？と思うでしょうが、観音様からとつてみれば人々の悩みは、遊びのように取り除ける智慧を持っているのです。だから仏様なのです。その仏はどこに居るかと思う人がほとんどでしょう。それは自分の心の中にもおられるのです。

それ仏法遙かに非ず
心中にして即ち近し

空海

空海著『般若心経秘鍵』に記されたお言葉です。それは「真理というものは外部にあるのではなく、自分自身の」心の中に存在しているものであり、外部に真理を求めてもそれは見つからないのである。「と説きます。仏教では一切衆生悉有仏性とあり、人に限らず、すべての生きとし生けるものには仏となる性質を持ち合わせており、それを種子といい可能性をあらわします。

その仏性に蓋をしているのが自身の衆生自秘である邪見である心の汚れです。排水管などでは経年により付着、堆積した汚物が水の滞りを起こします。同じように欲でまみれた心は邪見という清らかな心でものごとを見ることはできず正しい判断ができなくなっているのです。

心も部屋も同じように、整理整頓、キレイにしておけば、大事なときに探しものなど即座に見つけられます。

生きる上には、自身が清く正しく心がけていても外苦という外部から訪れる縁によって汚されることが多々人生にはあります。

そのために人は神社仏閣を参拝するなどして汚れた心をリセットさせに行くのです。それを六根清浄といいます。

六根とは、眼・耳・鼻・舌・身・意であり、嫌悪感となるニユースを眼で見たり、他人から漏れる愚痴が耳に入ってきたり、鼻をつまみたくなく臭い匂いを嗅いだり、拒否反応の示すほどの味を舌で感じたり、触覚となる痛みなど身体で痛感したり、過去に起きた苦悩となる思い出が意識となる心に生じたりする六つの根本から心を生み出す原因のことです。

こころを浄めたいときに対象となるのが仏教では基本的に仏像となるのです。

この度、五月に講演をさせていただきます。この長寶寺様のご縁より、大和家様より「阿弥陀三尊」をご寄贈していただきました。大和家の御尊父様なる仏師・大和峯山氏（一九三一・二〇二四）の一刀三礼となる渾身の仏像を法観寺にて安座していただくこととなり恐悦至極の思いです。工匠な技法より阿弥陀如来、観世音菩薩、勢至菩



薩の仏相、飛天光背、台座すべてにおいて峯山氏の意匠惨憺の精緻と精彩さは、神妙としか言い表せないほどの微妙巧緻です。「阿弥陀三尊」とは、阿弥陀三尊来迎ともいい、臨終の際に阿弥陀浄土（極楽）へ連れて往くために迎えに来てくれる仏様です。その形像は写真では正面からですので分か

らないですが、横からでは斜め向きに來迎する姿となっており、衆生を救済に向かう姿勢になっており、その躍動感あふれる相は仏師・大和峯山氏の丹念なる精魂の功匠そのものです。

なぜ阿弥陀如来は極楽浄土へ連れてくれるのかと言いますと、『仏説阿弥陀経』には、「説阿弥陀仏執持名号 若一日（中略）七日 一心不乱 其人臨命終時 阿弥陀仏与諸聖衆 現在其前 是人終時 心不顛倒 即得往生 阿弥陀仏 極楽国土」と記され、現代訳を省略し述べますと、「仏を信受し、一日から七日間、心が散乱しないなら臨終の際に阿弥陀仏はもろもろ聖なる弟子たちとともに現前し、また臨終の人は恐怖など動揺もないため極楽に往生することができる。」となります。

しかし、わずかな善行や福德を積むだけでは往生することができないとも説かれています。

阿弥陀如来も当初は菩薩である修行者でした。その後、さとりを開かれ四十八願を

立て、その阿弥陀如来が菩薩であった修行時代（兆載永劫の行）の名は「法蔵菩薩」であり、その師である世自在王仏の前で誓ったことに基づいています。

その四十八つの願いを立てた十八願が「念仏往生願」といわれ、十念すれば往生しないということがないようにしたいとの誓願が『仏説無量寿経』に説かれています。

なお十念の本来の意味は「阿弥陀仏の姿を心に十遍念い浮かべること」をいいます。

「寄贈賜りました阿弥陀仏の印相は「上品下生」であり、善行を積む篤信者が三尊の来迎により臨終者を浄土に往生させてくれる手の指で形をしています。阿弥陀如来の脇侍であり右側にいるのが大勢至菩薩で「智慧」の象徴を表し、左側が観世音菩薩で「慈悲」を表しています。

「阿弥陀三尊」の歴史は長く、日本では聖徳太子（五七四 - 六二二）の飛鳥時代から伝わっており、奈良時代を通じ平安時代に密教が盛んとなることで浄土信仰が国中で崇められるようになり、念仏の本尊とし

て尊ばれました。空海のもたらした密教の伝来より日本には多種多様な神や仏を迎えることができ、その教えは森羅万象のごとく宇宙に存在するすべては大日如来であると説き、古来の神祇信仰と融合させ、空海は独自の神仏習合を展開しました。

仏といえは釈迦を想起するように思う方が多いと思いますが、釈迦と同じように修行をされ悟りを開いた仏様たちを他土仏と呼びます。

日本に伝わる大乘仏教では如来をはじめ菩薩、明王、天部などが取り入れられ、その神仏の中心とするのが密教では大日如来であり、図画を用いて仏の世界観を表わしたものを曼荼羅といいます。その曼荼羅図では四方四仏に大日如来を囲むように配置されており詳細は省略しますが、その他土仏たちは釈迦の滅後に、他の世界で現在も教えを説かれる仏の許に生まれ変わる觀念が生じ、爆発的に普及しました。

『阿弥陀経』での「六方段」では、極楽浄土の教えが娑婆世界だけでなく他の世界で

も信仰されている証拠とし、東・西・南・北・上・下の六方の世界にも仏様がいると説かれています。

元はインド梵語でアミターバ (Amitābha) でしたが音写していくうちに阿弥陀仏となつたのです。また漢語では、量りしれない光を持つ者であるから別名を「無量寿如来」または「無量光如来」ともいいます。密教では大日如来の妙觀察智をつかさどる仏としています。

仏師 大和峯山氏の仏像は『読売新聞』に掲載されるなど多岐にわたり活躍されました。還暦を過ぎた一九九五年より、仏師・山本峯玄氏のもとで研鑽を積み、仏像の材料は北海道から取り寄せたヒノキやカツラ。如来像など数多く仕上げ、その精彩な形像は寺院から依頼を受けるほどの巧匠であった。峯山氏は「作っている間は「無心」になる。」その無心こそ「さどりの境地」であり、種子より仏性が開敷蓮華され、安心を胸に、弘法大師 空海のもとで安らかに過ごされていることと存じ上げます。

合掌

令和六年度

盂蘭盆会(お盆・先祖供養)

施餓鬼法要を行きましょう。



8月13日(火) 17時開式



あべの観音



あべの観音だより発行所

〒545-0021

大阪市阿倍野区阪南町3丁目41-17

あべの観音 無憂山 法観寺

TEL 06-7509-3806